

第5章 考察

第1節 町田遺跡火山灰下層出土の縄文土器の編年位置づけ

1. はじめに

本稿は、第3章第1節でとりあげた縄文土器のうち、同時性の高い資料とした火山灰下層出土の土器を他遺跡出土の縄文土器と比較検討し、その編年位置づけを試みるものである。先述したように、この資料は縄文中期中葉の北屋敷式土器を主体とし、瀬戸内系の船元式土器、関東・中部系の勝坂式土器を客体的に含む土器組成を示し、当該期の縄文土器の併向関係を示す重要な資料となり得るものである。

なお、船元式土器、勝坂式土器の分類・編年については、特にことわりのないかぎり、第3章第1節の註に掲げた文献に依拠する。

2. 北屋敷式土器の研究の現状

北屋敷式土器は、渥美郡渥美町の北屋敷貝塚出土の縄文土器を基準資料とする⁽¹⁾。しかしながら、その資料は公開されず、久永春男氏は口縁部に施文された三角形の連続刺突文を特徴とする土器群を中期中葉に属する土器として、北屋敷式土器を設定した。その後、紅村弘氏は北屋敷貝塚出土土器（南山大学資料）に中期初頭の土器が混在することを指摘した⁽²⁾。この「南山大学資料」により、増子康眞氏は梨久保式、鷹島式を組成の主体とする一群を北屋敷I式として分離し⁽³⁾、中期中葉の土器を北屋敷II式とし、その細分案も提示している⁽⁴⁾。

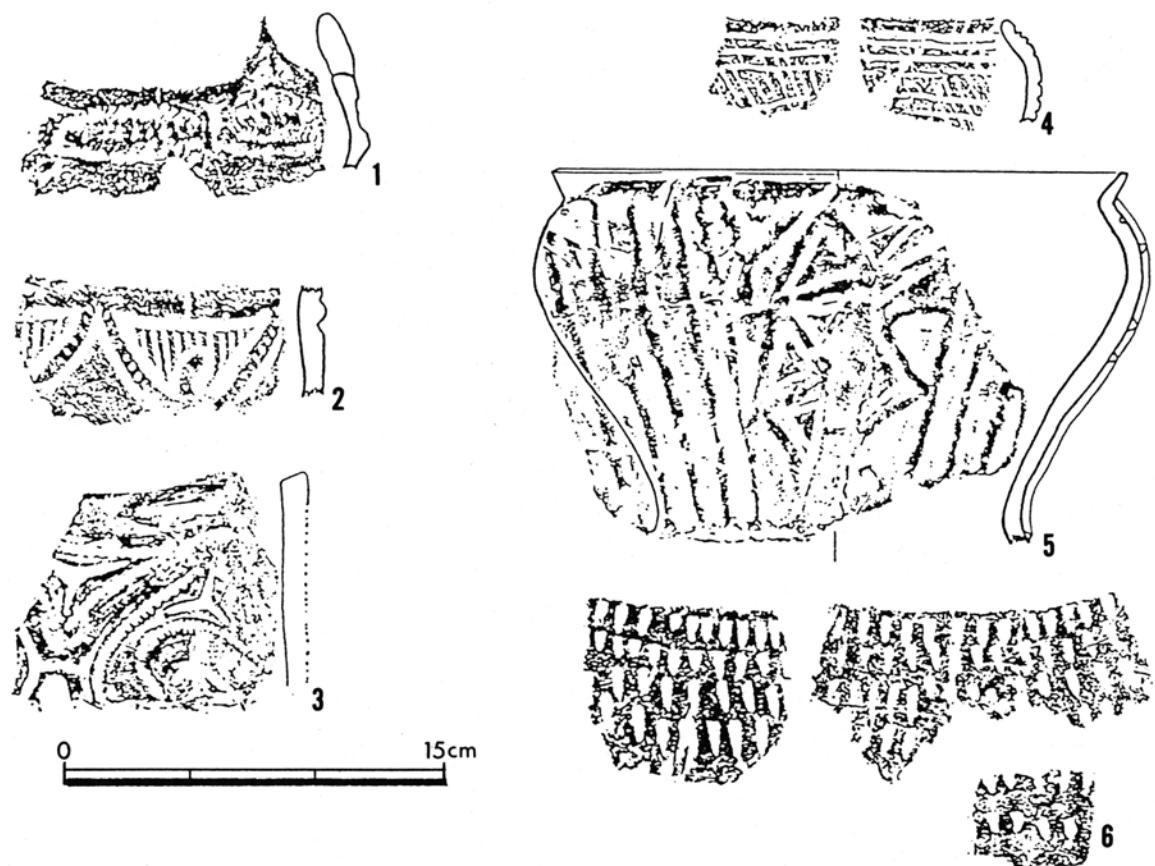
しかし、現在に至るまで、層位的に、または一括資料として北屋敷式土器を捉え得る資料は極めて少なく⁽⁵⁾、組成・器種構成に不明な点が多い。

3. 一括資料の検討

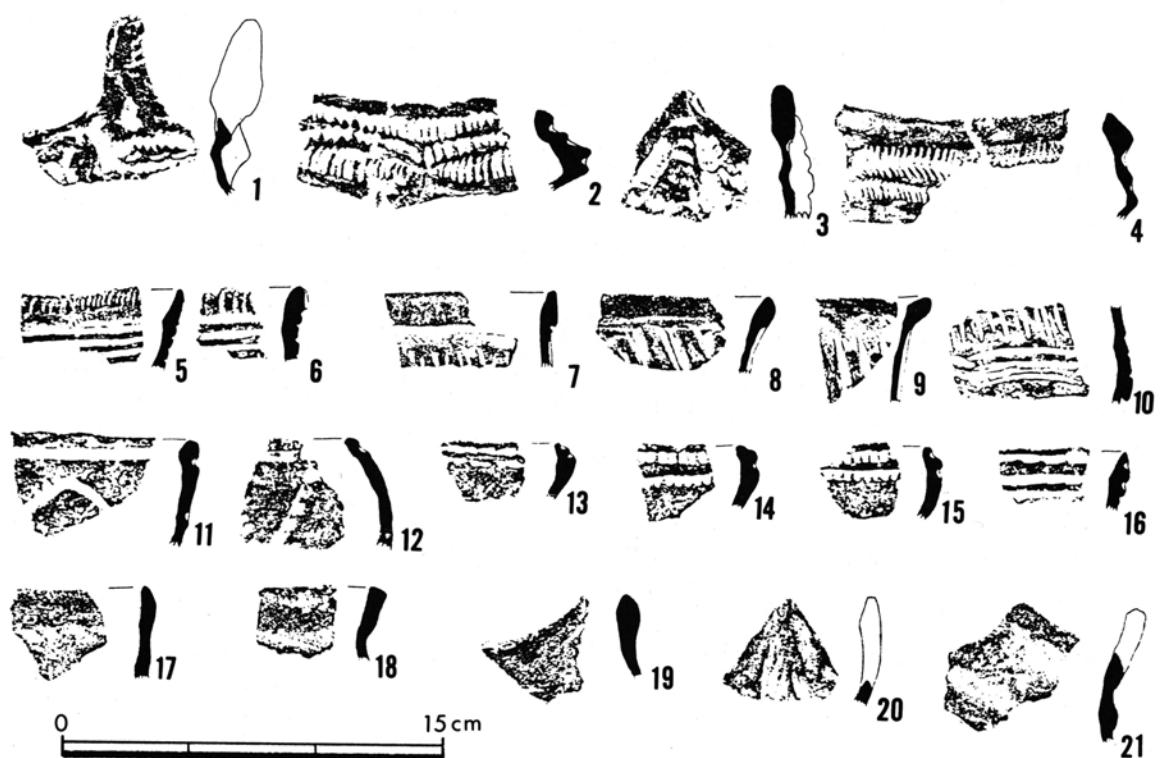
上述した資料の少なさにより、町田遺跡出土の縄文土器と同時期の良好な土器組成を示す資料が愛知県内にはない。ここでは、岐阜県益田郡萩原町に所在する沖田遺跡⁽⁶⁾住居跡出土土器を検討することにする（第27図）。

沖田遺跡住居跡出土の土器は、北屋敷式土器を客体的に伴ない、船元III式A類(5)、B類(4)、E類(6)と、「勝坂3式新相」土器⁽⁷⁾（2・3）、北陸系の上山田式土器を組成する。北屋敷式土器は、波状口縁をなす口縁部に橢円区画文を隆帯によって構成する(1)。その橢円区画文内は「く」の字形を呈する連続爪形文を充填しており、町田遺跡1類aに類似した特徴を有する。

以上、沖田遺跡住居内一括資料の北屋敷式土器の特徴、および船元III式、「勝坂3式（新相）」共伴は町田遺跡火山灰下層の土器組成と矛盾しない。このことより、町田遺跡火山灰下層の縄文土器は同時性の高い資料と考えられ、当該期の北屋敷式土器の組成を示す基準資料といえる。



第27図 沖田遺跡堅穴住居跡出土の縄文土器（註(6)文献より転載）



第28図 清水の上貝塚C層出土の縄文土器（註(5)文献より転載）

4. 北屋敷式における編年の位置

北屋敷式土器の良好な土器組成を示す清水の上貝塚C層出土の縄文土器（第28図）と型式学的に比較検討をおこなう。

報告者の山下氏によって、次の4類に分類されている⁽⁸⁾。

第三群第2類A 口縁部に文様が集約され、「く」の字形を呈する爪形文によって隆線を作りだす。

（1～4）（以下、第三群は省略）

第2類B（11～16）棒状施文具などで、器面に押引き沈線を引いたり、連續爪形文を施文する。

第2類C（5～10）半載竹管状施文具で文様を構成する。口縁部は、同施文具による連續爪形文を施文するもの（5、6）と、肥厚させるもの（7～9）とがある。

第2類D（17～21）無文土器。

ここでは、清水の上第2類A・第2類Cと町田遺跡出土の北屋敷式土器を比較検討する。

清水の上第2類Aは町田1類aと文様構成上、系統を同じくする。町田1類aとの相違点は、文様を構成する爪形文が細かく、より緻密であることがあげられる。また、隆線の成形技法が町田1類aと異なる。

清水の上第2類Cは、町田3類と系統を同じくする。町田3類との相違点を次に列挙する。①口縁部に連續爪形文を施文する例が認められる（5、6）。②半載竹管状施文具による施文が、町田3類より深く、鋭い。

以上の相違点を中期初頭からの爪形文系例の型式学的序列⁽⁹⁾から考えるならば、町田遺跡の北屋敷式土器は、清水の上貝塚より新しい様相を示す⁽¹⁰⁾。

5. おわりに

他遺跡出土の縄文土器とを比較検討した結果、町田遺跡火山灰下層の縄文土器は、北屋敷式土器の基準資料となりえ、清水の上貝塚C層出土の縄文土器より後出することが明らかとなった。今後、沖積地の縄文遺跡の調査が進めば、北屋敷式土器の資料が増加すると考えられ⁽¹¹⁾、その細分は今後に期待するところが大きい。

〔追記〕

尾張平野部の北屋敷土器としては佐野遺跡出土例⁽¹²⁾以外に、瀬戸市針原遺跡⁽¹³⁾、小牧市織田井戸遺跡⁽¹⁴⁾にみられるが、いずれもまとまった資料ではない。

資料収集にあたっては、多くの方々に御高配を賜わり、あわせて有益なる御教示をいただいた。末筆ながら、心より感謝申し上げます。

安達厚三 磯部幸男 伊藤正人 大熊厚志 鈴木茂夫 鈴木昭彦 野口哲也 松井直樹 山下勝年
名古屋市博物館 西尾市教育委員会 足助資料館 瀬戸市歴史民俗資料館 豊田市郷土資料館（敬称略）

(註)

- (1) 北屋敷貝塚出土の縄文土器のうち、豊橋市美術博物館所蔵の資料については、岩瀬氏の報告がある。北屋敷式土器の研究史は、この文献が詳しい。
岩瀬彰利「東三河における縄文中期中葉の土器について—北屋敷式土器の実体を探る—」『三河考古』創刊号 1988
1～8頁
- (2) 紅村弘『東海の先史遺跡』総括編 名古屋鉄道株式会社 1963 270頁
- (3) 増子康眞「東海西部の縄文前半型式編年試論—南森遺跡縄文式土器の考察に代えて—」『岐阜県八百津町南森遺跡発掘調査報告』八百津町教育委員会 1980 16～23頁
- (4) 増子康眞「東海西部沿岸地域縄文中期前半土器型式の検討—北屋敷式の細別と咲畠式の再検討」『知多古文化研究』
2 知多古文化研究会 1986 69～84頁
増子氏の細分案は「恣意的な資料操作による型式学的序列」である（佐原眞「遺物変遷の順を追う—型式学的方法の原理—」『古代史発掘』5 講談社 1974 133～136頁）。後述するように、一括資料で検討をくわえると、69頁の「縄文中期編年表」は、他地域との併行関係より破綻をきたす。
- (5) 県内の報告書で見るかぎり、層位的に北屋敷式土器が捉えられ、かつ組成の解る例は、清水の上C層出土の縄文土器だけである（山下勝年・磯部幸男・杉崎章『清水の上貝塚』南知多町教育委員会 1976）。なお、未発表資料ながら北屋敷式土器を細分する可能性のある土器群としては、南知多町山田平遺跡出土土器がある。磯部幸男、山下勝年氏の御高配により実見する機会を得た。
- (6) 紅村弘・増子康眞他「沖田遺跡」「飛驒桜洞、沖田」萩原町教育委員会 1973 51～76頁
- (7) 「勝坂式土器の研究」にV式の勝坂式土器として紹介してある（第3章第1節註(6)文献94頁）。
- (8) 註(5)文献34頁
- (9) 註(3)文献同じ。
- (10) 北屋敷貝塚、桜遺跡出土の北屋敷式土器（註(1)文献）は清水の上貝塚と同時期と考えられ、北屋敷貝塚出土の勝坂式土器は、IV式の資料として紹介されている（註(7)文献94頁）。
- (11) 標式遺跡となっている北屋敷貝塚（標高2m）を初め、低地に立地する遺跡がこの時期に多い。「縄文中期小海退」が指摘されており（前田保夫・山下勝年・松島義章・渡辺誠「愛知県先丸貝塚と縄文海進」『第四紀研究』第22巻第3号 1983 213～222頁）、資料の少なさは、このことと無関係ではないと考える。
- (12) 澄田正一・大參義一・岩野見司「佐野遺跡」「新編 一宮市史資料編一」一宮市役所 1970 10～36頁
- (13) 安達厚三氏の御教示による。瀬戸市歴史民俗資料館の御厚意により実見する機会を得た。
- (14) 中島隆『織田井戸遺跡発掘調査報告書』小牧市教育委員会 1983 62頁